

# 対馬学フォーラム 2016 と 持続可能な社会実現研究会に関する報告

鈴木 奈美

## はじめに

本稿は、「対馬学フォーラム 2016」と「持続可能な社会実現研究会」に関する報告である。以下では、二つの研究会の詳細についてまとめていく。

### 1. 12月11日：対馬学フォーラム

対馬学フォーラムとは、対馬内外の学生団体など、対馬にかかわる 50 以上の様々な団体が、対馬という地域に関する研究成果を発表する場である。午前は地元小中高生の発表が、午後はポスターセッションと分科会が行われた。

#### 〈午前の部〉

##### 「私たちの自慢のふるさと」今里小学校 5・6 年生

今里小学校の発表では、最後に報告を行った男子児童の発表が印象的であった。彼は、自分の小学校の友達が漁師を将来の夢に選ばないことや、漁師が少なくなっているという現実を知りつつも、自身の父が漁師であることを誇りに思っており、大きくなったら漁師になりたいと堂々と発表していた。参加者の中には、その様子を涙を浮かべながら見守る人もいた。

##### 「すごいぞ！ニホンミツバチ」大船越小学校 4 年生

大船越小学校の児童たちは、地域の方を講師に「ハチドウ」をつくって観察した成果を発表した。「ハチドウ」とは、対馬のいたるところでみられる人工のハチの巣箱のことである。島内では、約 3~4 万個ほど設置されている。丸・角・重箱型の種類がある。杉などの匂いの強くない木材を使い、カビ防止のためにガスバーナーで表面を焼いたり、入り口を小さくし屋根を取り付けたりするなど、ニホンミツバチが安心して住めるように様々な工夫が凝らされているという。また、ハチが蜜の採集を行う花としてキンリョウというランを植えたことも報告された。

次に、セイヨウミツバチと比較しつつ、ニホンミツバチについての説明がなされた。セイヨウミツバチの体が黄色っぽいのに対し、ニホンミツバチの体は黒っぽく、11 mm くらいと小さめで、優しい性格をしているという。天敵がキイロスズメバチとシマアカスズメバ

チであることや、ニホンミツバチ減少の要因であるスムシ、農薬のニコチノイド、ウイルスなどについても詳しく調べて発表してくれた。セイヨウミツバチのハチミツは年に三度収穫できるが、ニホンミツバチのものは、年に一度しか収穫できない。ハチたちが冬を越せるように、ハチミツの3分の1は、あえて巣に残す。そのため、ニホンミツバチのハチミツの価格はセイヨウミツバチの6倍になる。このハチミツは対馬の美しい夕焼けをイメージした「対馬サンセットサイダー」などにも使われている。

#### 「島人ぬ宝、われら佐護米・ツシマヤマネコの魅力伝え隊！」佐須奈小学校5年生

佐須奈小学校の児童は、ベンガルヤマネコを同じ祖先として持つ、ツシマヤマネコとイリオモテヤマネコについて、実際に西表島を訪れ、フィールドワークで学んだことをもとに発表した。ツシマヤマネコ減少の原因として、鳥獣捕獲用の罠として以前使われていたトラバサミや交通事故の増加、農林業の衰退による餌のネズミの減少などがあげられた。また現在、ツシマヤマネコの生態に配慮した佐護ツシマヤマネコ米の製造、販売が行われている。この活動では、水田の減農薬や生物調査を行ったり、ツシマヤマネコの生殖時に餌がたくさんとれるように田植えの時期をずらすなどしているという。

#### 「対馬の未来を考える」雞知（けち）中学校3年生

対馬の未来をテーマに掲げたこのグループは、近年の人口流出の原因とその対策をポスター形式で発表した。また、韓国との交流について、アンケートやフィールドワーク調査を行った結果についても報告した。対馬で働く場を増やす提案に際し、対馬の自然を生かすことや、既存の建物を使って会社をつくること、対馬にしかない魅力を島外の人に知ってもらうといったことが必要であるとし、地域の自立と持続を視野に入れた考察をしていた。とくに空き家をリフォームしてカフェをつくる場合の予算や1か月にかかる人件費、光熱費などの費用を算出するなど具体的な提案をしていたことが印象的だった。

#### 「対馬高校環境スタディーツアー in 宇部市活動報告」対馬高校

対馬高校の生徒は、山口県の宇部市でのスタディーツアーについて発表した。対馬の沿岸部では韓国などから来る3万㎥もの漂着ゴミに悩まされている。そこで山口県の宇部市で、煤塵による公害問題に対し、市民が一丸となって活動し問題の解決に導いた「宇部方式」を、対馬の漂着ゴミ問題に当てはめられないか検討を行ったという。この宇部方式とは、情報の公開を基に、地域の「産・官・学・民」の四者が相互信頼、連帯の精神に根差して、一体となって、自分たちが住んでいる地域社会の健康は自分たちで守ろうという自意識のもと、科学的データに基づく話し合いによる発生源対策を第一に、法令や罰則に頼ることなく、公害の未然防止と環境問題の解決を図ろうとする地域ぐるみの自主的な活動を理念とするものである（宇部市2017）。

#### 「対馬発 離島と世界のエネルギー問題解決に向けた実践研究」

大阪大学大学院人間科学研究科 松村悠子氏

対馬生まれ対馬育ちの松村氏は、現在は大学院で島嶼研究と環境社会学を専門としている。今回はデンマークのサムソ島などの成功例をモデルとし、離島での持続可能なエネル

ギー開発についてその研究経過を発表した。対馬のような離島という環境は、海洋や風力、太陽光などの新エネルギーとの親和性が高い。その一方で、塩害など厳しい自然環境による故障が多いことや、自然エネルギーの導入には電力会社の許可が必要なことなど、まだまだ課題が多く開発が進まない要因となっている。松村氏が行う対馬でのエネルギー開発の課題研究が、日本、そして世界のエネルギー問題の解決につながることに期待したい。

午後の部のまとめに移る前に、ここまでの内容についてコメントしておきたい。

小学校・中学校の段階から、自分の住んでいる地域の自然資源や産業、人口動態などについて総合的な視点から学習する機会があることは、すべての地域の児童たちができることではない。対馬でそうした教育や学習を行えるのは、貴重な自然と教育環境があつてこそである。そのことに児童、生徒が気づき、成長してから今の学習がどのように影響するのか興味は尽きない。また、彼らの発表を見に来ていた保護者にとっても対馬フォーラムは貴重な場なのではないかと思った。たとえば、佐須奈小学校の児童たちが、交通事故がツシマヤマネコ減少の大きな要因となっており、それを防止するために保護者に夜に運転する際にツシマヤマネコに気をつけるよう呼びかける場面があつた。保護者たちは、その呼びかけに対して、他人事ではないと自覚させられた様子であつた。このように児童らの発表から、大人たちも自らの住む地域の資源や文化を守っていく方法を学ぶことができるのではないだろうか。様々な世代の人々を巻き込んだ地域づくりに今後も期待したい。

#### 〈午後の部〉

午後の部ではポスターセッションと島内外の参加者それぞれが興味のトピックを選んでの企画集会が行われた。私は主に以下のものを見て回った。

#### 九州大学「島おこし活動に温度差はあるか？—対馬市を対象とした実態調査—」

対馬市の島おこし活動における住民間の温度差についての調査によって、島外への「転居経験の有無」が集団的効力感に関連があるとの結果が導き出されたとの報告が行われた。転居経験をUターン・Iターン・転居経験なしの三つに分けると、転居経験なし・Uターン・Iターンの順に集団的効力感が高くなったという。私はこの調査に対して、Iターン者についてのさらなる調査、島外で同様の調査を行った場合にどのような結果が得られるのか、などに強く興味をもった。

#### 京都大学「民泊のすすめ ～日本中と家族になろう！～」

対馬ではブルーツーリズムやグリーンツーリズムの滞在場所として、民泊を推進している。ここでは民泊をするまでの仕組みや手続き、民泊をする上でのやりがいなどを発表していた。高齢化の進む地域でも、島外の大学生などと家庭料理や体験などを通して交流することにより、民泊のホスト側が自分たちの文化や郷土に自信を持つことができる。こうして世代や地域を超えたつながりが形成され活気があふれるなど、民泊に副業や観光としてだけではなく大きな可能性を感じた。

ここで、午後の部についてコメントしたい。

午後の部は主にポスター発表と企画集会であったが、ともに参加者が選ぶことができるため自由度が高く、発表者との意見の交換が活発に行われた。様々な団体の活動を目にすることによって、新たな人とのつながりやアイデアが生まれるような空間になっていた。進行中の活動が主であるため、毎年の成果の発表が楽しみである。

## 2. 12月12日：「持続可能な社会実現研究会」志多留集会所

「持続可能な社会実現研究会」とは、持続可能な社会の実現に向け、現在持続可能性をキーワードに対馬をフィールドに取り組みられている各プロジェクトの動向を共有し、諸科学・諸プロジェクトの連携と共同を図ることを目的とした研究会である。志多留集会所を会場とし、四つの大学と対馬で活動を行っている三つの団体の方が参加し、研究について発表し、意見の交換会を行った。

### 一般社団法人 MIT 吉野元氏「持続可能性プロジェクト紹介」

一般社団法人 MIT の吉野氏は3年前に対馬に移住してきた地域づくりの担い手の一人である。MIT では、ツシマヤマネコの保護推進のためカレンダーやインスタントラーメンなどの多様な種類の商品の制作・販売にかかわっている。カサゴ、イカ、マアナゴなどがモチーフになった手ぬぐいにはメジャーの機能も備わっており、基準に満たない魚をリリースすることへの意識を促すコメントが添えられているなど、MIT がつくる商品は対馬の環境や自然などに配慮したものである。MIT は行政や市民、そして大学などの機関との間をつなげる大事な橋渡し役を担っている。一般社団法人としての事業でかかる費用や収入などについても公開していただき、政府の補助金に頼らない自立した経済活動も知ることができた。こうした地域貢献を目的とした企業が、確実に利益を出しているという事実は、今後ほかの地域で同じように活動することを目標とする人々のモデルとなり、勇気を与えるだろう。

### 九州大学決断科学センター「環境・災害・健康・統治・人間科学の連携による問題解決型研究」（課題解決に向けた TD 研究）プロジェクト紹介

九州大学決断科学センターでは、専門分野の域を超えて社会問題の解決に導く人材の育成を目標とした博士課程教育リーディングプログラムを設けており、対馬での活動もその一つである。

私がこの発表の中で特に興味を持ったのは生態系配慮型水田復田モデルについての発表である。生態系配慮型水田復田モデルとは、人口減少、高齢化による耕作放棄地の復田に外部からのマンパワーを使い、さらにツシマヤマネコなどの保護を行うことで作物に付加価値をつける取り組みである。ここで、外部からのマンパワーに島外の大学生や、グリーンツーリズムの一環として韓国からの観光客の力を借りることについて討論になった。田おこしや田植え、稲刈りなど、人手が必要となる時期にはインバウンドの力を借りられるが、草取りや水の管理など、日々の手入れが必要となるところは地域の人に手を借りる必要があるなど様々な意見が出た。過疎化する地域の農業の解決策としてモデルになり得る

のではない。しかし、ここでもその先駆けとなる担い手の存在が不可欠だと感じさせられた。

### **合同会社フラットアワー 錢本慧氏「持続可能な漁業プロジェクト紹介」**

錢元氏は、東京大学大学院修了後、対馬にて産業水産学を主とした海洋研究をしつつ、対馬での持続可能な漁業に対する取り組みを行っている。漁業組合・築地などを介すうちに値段も鮮度も下がってしまう魚を、インターネットなどを通じて全国の購買者に直接販売することで付加価値を上げるなど、地元の漁師の人びとや対馬の海が持続可能となっていくような仕組みを進める活動を広めようとしている。錢本氏の話聞いて、この方法や考え方は対馬だけではなく、ほぼすべての漁業に当てはまることであり、対馬で成功させることがこの先全国に広める一歩となるのではないかと思った。このように研究の成果を可視化してくれる人が地域に定住することは、地域にとって大きな力になるだろう。

### **立教大学 ESD 研究所 阿部治所長「これまでの ESD と対馬について」**

阿部教授は長年、環境教育の研究をしており、立教大学 ESD 研究所の所長も務めている。2016 年には対馬と ESD 研究所の間で覚書が締結された。ESD (Education for Sustainable Development) とは、「持続可能な社会の担い手を育てる学び」のことであり、2030 アジェンダの「持続可能な開発目標」(Sustainable Development Goals : SDGs) にも含まれ、「国連 ESD の 10 年」が終わった後も重要視されている。現在日本や世界は自然環境や経済が持続不可能となっている。これらのグローバルの問題は、私たちに身近なローカルの問題とつながっている。だからこそ、対馬のような場所で「人づくり」を行い、問題の解決に向けて取り組むことは、ゆくゆくは日本や、世界の課題解決へとつながるのではないか。

### **ランチミーティング (質疑応答・意見交換会)**

昼食は「したるんるん倶楽部」の皆さんにご用意していただいたお弁当と、地元でとれたヒラマサのお刺身などをいただいた。「したるんるん倶楽部」では、地域で余ってしまう野菜や果物を使って週 2 回ほどお弁当をつくり、販売するなどの活動を行っている。

## **3. まとめ**

対馬に滞在するに当たり、初日は対馬市議員の斉藤久光氏のお宅に民泊させていただいた。斉藤氏のお宅はご自身がデザインされ、親戚の大工さんとイメージをすり合わせてつくった木のぬくもりが感じられる家だった。ブナやケヤキ、ヒノキなどの木材はすべて斉藤氏が所有する山からとれたといい、対馬の木材資源の豊かさを体感することができた。太くつややかな木の柱たちは新品のように思えるが、実は築 25 年で、斉藤氏が自ら毎年木蠟を塗ることでその美しさが保たれている。しかも木々は年を重ねるほどにその色が次第に赤くなり、ますます美しくなるそうだ。

夕食時には、斉藤氏が捕獲されたというイノシシの鍋や、対馬の海で獲れた新鮮なお魚(ヒラマサ)や(いり焼き)、斉藤氏がつくられたというどぶろく「菩提酒しろかねの里」、斉藤氏の奥さんお手製のそばをごちそうになりながら様々なお話をうかがった。この猪鍋

に使われているイノシシは、本来対馬にいたものではないそうだ。その昔、対馬ではイノシシが繁殖しすぎてしまったため、対馬藩が一斉に退治したという。しかし、その後また本土から持ち込まれたイノシシが過剰に繁殖してしまい、現在も畑などに下りてきて畑を荒らしている姿が見られている。また対馬にはツシマシカという対馬固有のシカがいる。こちらは以前保護種として扱われたが、繁殖力が強く、1年で倍増する。そして木の低いところの皮や若い草木をむしり取って食べてしまい、植生を荒らし、生物多様性を脅かす一因となってしまっている。これらの鳥獣被害の対策として、イノシシー頭捕獲につき1万円などの報奨金などを出すなどしているが、猟師の数は高齢化とともに年々減るばかりである。それに加え、対馬藩によるイノシシー掃などがあったことによってジビエとして肉を食す文化が途絶えてしまい、狩ったとしてもうまく流通しないことが、対策の進まない要因の一つにもなっている。この解決には、料理を出す店と、捕獲後すぐに肉をさばく人、狩猟をする人というルート確保と、捕獲直後に血抜きした新鮮な肉は臭くないという常識が広まることが重要であると話されていた。イノシシとシカの問題は、まだまだ課題はたくさんあるが、新たな文化と観光資源ともなりうるのではないか。

対馬を訪れ、様々な人々が対馬の地域づくりに携わっている様子を見ることができ、地域の自立の可能性について考えさせられた。豊かな自然にあふれ、韓国との国境に接し、歴史もある魅力あふれる対馬という地域と、対馬とは異なる歴史や文化を持つ地域では、同じことをそのまま適用することはできないだろうという思いを抱いた。しかし、対馬で活動する人々は、日本と対馬は島という同じ条件をもっており、対馬での地域づくりに今後の日本社会の課題解決の希望を見出している。彼らのその姿勢から新たな知見を得るために、私も対馬についてもっと学習していきたい。

#### 【参考文献】

宇部市, 2017, 「宇部方式とその理念」(2017年2月20日取得

<http://www.city.ube.yamaguchi.jp/machizukuri/kankyuhozen/kokusaikankyou/ubehoushiki/ayumi.html>).

(すずき・なみ 立教大学社会学部社会学科2年)